

—「カサツ」風も無く一枚の葉が落ちてかすかな音がした時、

この詩集が成った—

ぷろろーぐ

(一) 午前

午前の清々しい時間……。椅子にゆつたりと腰掛け、目の前のテーブルの上の美味しいコーヒ―をすすりながら……。自然という豆を挽き、季節の粉に、言葉を注いで抽出した、淹れ立てのほえむはいかが？ 花模様のふかふかとした椅子の上に、透明な白金色の陽の光が帯のように掛かり、動かないかのように留まっています。部屋の奥の方の大きな黒塗りの柱時計にも弱い光が斜めに差し込み、真鍮の重たそうな振り子はゆっくりと揺れてはいますが、針は少しも歩み出しているようには見えません。

(二) 午後

昼のひと時、ランチの後に…、幾ばくかのぼえむのデザートでも召し上がりませんか。決して腹の足しにはなりません、昼の吐息が草の香りと共に、風に乗ってやって来るかもしれない。

(三) 夜

夜空に、何かもの言わずには、通り過ぎることができない程
鮮やかな三日月が、掛かった晩に、一杯の味わい深いコーヒート、
一編の今日を忘れてしまうぼえむはいかが。渋みが足りないか
もしれませんが…。

どりっぴんぐ ぼえむ 目次

ぶろろーぐ	3
-------	---

春

早春	12
初モンシロ	14
生け花	18
またヒバリを見失って	20
もぐらとミミズ	24
桜	28
斜面のカタクリ	30
ツツジの花	36
藤棚	40

夏

初夏	46
紫陽花	48
おしろい花	50
山百合	52
夏の夕暮れ	58

秋

月	62
秋の訪れ	64
秋のもや	66
コスモス	68
十月桜	70
落葉	74

冬

暗い夕暮れ	78
すすきの枯野	80
枯野の雀	82
冬空と街路樹	84
雪	86
雪の翌朝	88
八手	90

余滴

公園の美術館	94
開店前の喫茶店	96
えびろーぐ	99

春

早春

公園の 斜面に
紅梅と 白梅が
立ち並んでいる

石の階段を

(よく見ると、玉砂利をコンクリートで固めたもの)
登って

脇の 細い曲がりくねった道を
歩いて行くと

ずっと手前から

いい香りが 濃く

匂って来る

まだ周りは 枯木が多く

空気も ひんやりと漂っている中

紅色と白色と香りが

はじけている

初モンシロ

今日は暖かいが

空は ぶ厚い雲が

重なっている

黄色いタンポポが 沢山

緑の草の間に

刺繍のように 咲いている

そこへ モンシロチヨウが

ひらりと 飛んで来て

しばらく花の周りを飛び回ったあと

強い風に流されるように

羽を閉じて

昇って行つて

やがて 公園の近くの家の花壇に

降りていったよう…

空には 高く

ヒバリが さえずっている

目を細めて見ていたが

ちよつと目を離れた隙に

声は聞こえるが

姿が

見えない

雲に隠れてしまったのか…

生け花

三月初め

まだ寒さの 抜けきらない頃

二、三日前に

どこで習い覚えたのか

母が 見よう見真似で活けていた

生け花が

今日 床の間に飾ってある

白い陶器の 円形の水盤の

部屋の冷たい空気を

吸い込んだような

びくりともしない水面

離れ小島のような

真ん中の 剣山に

未だ つぼみから

顔を 出した程の

クロッカスの 黄色い花

またヒバリを見失つて

今日は

少し薄雲が

掛かつてはいるが

いい天気

まだ耕し始めてもない

泥んこの 田んほの上で

今日もヒバリが 空高く

さえずっている

：

しばらく見上げていたが

一瞬 目を離すと

探しても まぶしくて

また 見つからなくなった

∴

青空には

太陽と ヒバリのさえざりだけ

∴

たまに カラスが二羽、三羽

低空を 飛び渡って行く

∴

道端には

まだ枯草も残ってはいるが
緑の下草やナズナなどが
多くなつて来ている

…

草むらから

一匹の ミミズが

にゆるにゆると

這い出してきた

いつ踏みつけられたり
戻れなくなったりして
干からびるかも

知らないのだが…

もぐらとミミズ

うらかな春の

昼下がり

黄色いタンポポと

白いナズナと

紫色の堇で 織った

絨毯のような 刺繍から

ちよつと

外れたところで

帽子のように 盛り上がった

茶色い土が

時々 少し動く

頭や顔は見せないが

しばらくして 土は

また少し動く

そばには 跳ね飛ばされたか

砂土まみれの

節柄模様の ツナギを着たミミズが

うねっている

…

やがてミミズは

多分頭から ゆっくりと

穴を掘って

少しずつ 体を前後に動かしながら

入り込もうとしている

：

もぐら（多分）は相変わらず

時々 土を

上に向かって

動かしている

桜

満開の桜の花の

花びらの

そよ風に 吹かれて

少しずつ

散り行く時

音の無い音楽が

流れる

春という

斜面のカタクリ

公園の

(白塗りの) 小さな立て看板に

「カタクリ」と書いてあったので

矢印の方へ

歩いて 行って見ると

耕す前の

田んぼのような

水溜りの

一画が

∴

おかしい、カタクリなんて

どこにも見えない？

∴

遊歩道から

小さな水路を渡す 板を通って

少しぬかるんだ

あぜ道のようなところを 進むと

道を 挟んで

水溜りと 反対側に

黄色と黒の 虎柄のロープが

張ってあり

「こっちか」と

目を向けると

波うつ丘の

斜面に

カタクリの群れが 花を

反りかえらせたり

くるませたり

：

写真を撮ろうとして

オットットット

バランスを 崩しそうになったが

：

そこへ

一匹の

背に 水色の模様が入った
蝶が

やって来て

あぜ道と遊歩道を渡す

丸太を削いだ 板に停まり

ゆっくりと 羽を閉じたり

開いたり

：

やがて もう一匹

水色の模様の蝶が

やうて来て

からみ合つて 螺旋のように

回りながら 昇つたり

降りたり

：

やがて

また 離れて

板に 停まり直した

：

水面が

春の光を

幾つか

はね返して
眩しかった

ツツジの花

今日は とても

いい天気

日なたでは

暑いくらい

遊歩道の脇の

ツツジも

つほみから

たくさん

花を

開きはじめている

白色 紅紫 桃色 桃色の

中央に濃い紅紫

：

ツツジの花は

匂いあるのかな？

マスクを外して

嗅いでみる

白い花は

香りがほとんど無い

でも有る

ごくほのかないい香りが

開いた花卉のすぐ近くに

漂う程も無く

僅かに感じられる

紅紫の花も

嗅いでみる

同じように

僅かに

有るといえば有る

いい香りが

向こうの

ドウダンツツジには

沢山のミツバチや

マルハナバチなどが

飛び交っている

釣鐘状に 垂れた

白い花壺に

下から潜り込んで

蜜を 集め

喜びまわっている

背中を てからせながら

藤棚

公園の奥の方

野生の藤を敷き詰めた

棚の

淡い紫色の花の

甘い香りに

誘われて

さまざまの種類

沢山の蜂が

集まって

飛び交っている

時折

吹く風に

垂れた 藤の花房の

筆のような

穂先が

なびいている

棚の前の

ある一定の離れた場所で

一匹の大きな熊蜂が

「ブーン」と 羽音を立てて

浮きつつ 移ろいでいる

時に

飛び込んで来る

別の熊蜂に

ぶつかり合って

「カチッ」っと

音を立てては

また藤棚の前で

一定の距離を置いて

飛びながら

浮いている

やがて

強い風が

棚の後ろから

やってきて

藤の花びらを散らし

棚の後ろの

立ち木や 垣根の葉を散らし

あの蜂は

浮きながら よけようと

していたようだったが

余りの多さに

葉や花びらが 一枚ぐらいは

当たった
ようだった

夏

初夏

浜昼顔は

待っているよう

砂浜に

寄せる浪の

向こうから

渡ってくる

風

また次の風を

紫陽花

また

紫陽花の色づく頃に

なつて来ましたね

部屋の 切りとつたような

窓の外を

机に向かつて 腰掛けて

もの憂げに 見ている

しとしとと 小雨に濡れている

紫や水色や 白やピンクの

数々の花を

その厚手の葉を

おしろい花

白と赤のおしろい花

ただそれだけなのだけれど

白と赤の

たくさんの

おしろい花

ただそれだけなのだけれど

山百合

天気のよい

午前

木々が

覆い被さる

細い道を 歩いて行くと

土の上には

生い繁る葉や

垣根の木々の

影が

眩しい陽を浴びて

光の合間に

黒く

鮮やかに

浮かび

揺らゝと

吹く風に

黒い影も揺れて

：

するとふいに 脇の垣根から

目の前に

何かが飛び出して来た

それらの塊は幾つかの鳥のよう

勢いよく

足をすべらしたのもいた

それらは

私に 気付いたものか

数歩駆けて

そそくさと

また 垣根の隙間に

潜り込んでいった

その間際になって

やっと

雛を ひき連れた

鶉かも 知れない

と思つたが

：

彼女は留守で

祖父と立ち話をした

最近都会から引越して来た一家の

祖父が、

「朝、鳥の鳴き声がうるさくてかなわない」

と言つたので、私は笑つた。

帰る途中、彼女の家の裏手の

斜面に

一本の 白い大きな

美しい

山百合の花が

誰に 見られるでもなく

ひっそりと

咲いていた

夏の夕暮れ

湧き出た雲に

隠れてはいるが

まだ陽は

落ちきる前

林では

セミの合唱が

盛んに聞こえ

そのずっと上の方に

切り爪のような

三日月が

まだ青い空に

白く浮かぶ

：

やがて 夕闇がせまってきた

林を モノクロのシルエットに染め

セミの最後の方の声も

途切れ／＼になり：

聞こえなくなると

夜の帳が降ろされて

黄色い

三日月が

一段と 映えて
掛かっている

秋

月

雲間から現れた

月は

海の波立つ面に

沖から浜へと

映し出す

うねる

光の道

:

透き通った

静かな

黄白色の珠玉に

淡く

美しく

輝いている

秋の訪れ

やわらかい朝の陽ざしが
白と赤銅色の
つやつやした
すすきの新穂を
静かに輝かせ
垂れた穂は
弱い風に
ゆっくりと揺れている

繁みでは

鳴き足りないのか

眠たそうな

僅かばかりの

コオロギが

羽を揺すつているようだ

淡い 青い空には

ちぢれた ヒツジ雲が

幾つも 幾つも

並んでいる

秋のもや

ある朝

辺りは もやがたち込め

物に 近づくと

はつきりとはして来るのだが

：

やがて

脇の方 東から

明るい日ざしが

もやを 晴らし

しつとりとした紅葉を

黄づいた葉を

道端の 枯れ行く草の葉を

際立たせた

コスモス

一面に咲く コスモスの花

空は

青く 晴れて

白い雲を

幾つか 浮かべ

そよそよと

風が

緑の繊い葉や

ピンクの花を

なびかせ

曇りの日は

濃淡の雲を 吐き出し

雨の日は

絞り落ちて 濡れる

花々

十月桜

落葉というには
余りに 大きな
茶けた
プラタナスの
カサカサの葉が
幾枚も
てんでに 積み重なった
公園の
じゃり混じりの

遊歩道を

歩いていると

脇の 土手に

一本の

小さな花の木

ああ ここにも咲いていた

：

おととい

神社の庭を

掃いていた

おばさんから 名前を覚えてもらった

二本の花の木

…

「今年は 咲くのが遅かったんですよ」

「小さな花なんですけどね」

「葉が もう散ってしまつて花だけなんですよ」

目立たない 小さな白と薄桃色の八重の花の木だが

ここにも 一本…

落葉

サクサク

サクサク

遊歩道の

降り散った

落葉の上を

踏み歩いていく

：

また吹く風に

応えるように

多くの枯葉が
降ってくる

私が 歩こうとする前にも…

まるで

侘しく 美しいその姿を

見せるように…

やがて

その中に 入っていく

でも 落葉は

避けるかのように

少しも掛からない

：

でも

それを 抜け終わる頃になって

一枚の枯葉が

私の肩に留まった

冬

暗い夕暮れ

夜からの 激しい雨風

天気予報では

午後から 雨が上がって

晴れてくると

ラジオで言っていたが

また 暗い空から

雨粒が

落ちてきた

：

今日は このまま

暮れて行くのだろうか？

そう心でつぶやいて 一人

図書館を出た時

「ガー」と空のどこか

頭の後ろの方で

そうだと言わんばかりに

鳴き声でした

見ると 電柱に停まっていた

一羽の

大きなカラスが 羽を広げて

飛び立って行った

すすきの枯野

枯れたすすきが

その 褐色へと移ろう白い穂を

風が吹いては

なびかせ

：

だが、むしろ

風が無い時は

雑然と 不気味な

荒涼とした

空間を

作っている

∴

永遠とも違う

∴

空虚さのみの漂う

空間と時間

枯野の雀

枯れた

すすきの 荒れた野に

一人来て

侘しさに

素早く 飛び散る

雀の群の

時よりも速い気がして

僅かに

慰められる

冬空と街路樹

空は 一面

灰色の雲の

幕に覆われ

時々

灰色の 隙間から

形の見えない

冬の太陽が

ぼんやりと

薄明かりだけを

透かしだし

立ち並ぶ

高い街路樹を

冷えくくと

風も無く

不思議な

冬の雰囲気

が
包み込む

雪

並ぶ オレンジ色の街燈に
降り掛かる

雪の粒が浮かび

家路につく 僅かの人々

歩道に積もった雪は

ふかふかと靴を 吸い込み

時をさえ 吸い込むよう

：

静寂だけを残して

雪の翌朝

昨日降った 雪が

今朝 まだところどころ

うっすらと 残っている

そうでないと ころでも

畑の 黒い土の上に

霜が 一面

パウダーのように かかり

あるいは 霜柱は

土を 大きく押し上げて

その太く細い 並んだ氷の体が
朝陽に 輝いている

八手

二階から ふと

庭を見下ろすと

一本の 八手の白い花が

こちらを向いて

咲いていた

緑色の 厚手の葉を

広げて

：

こんなところに

八手なんて

植わっていた？

しかも

真南の 塀の脇に

：

誰かが植え替えたということも

ないようだ

：

昔はよく 北側の

厠の方に

植えられていたと 思ったのだが

：

肌寒い 薄日の中
何十年かぶりに その存在を
感じた
：

余滴

公園の美術館

天気の良い夕方

さつき閉館の時刻を過ぎた

公園の奥まった所に有る美術館

その前の レンガ風に敷きつめられた

広い坂の 真ん中を

一羽のガラスが

鑑賞を終えたかのように

満足気に 腰を左右に揺すりながら

しっかりと 黒い足を 踏みしめながら

下りてくる

(もしかして私よりも しっかりした足取りで)

開店前の喫茶店

開店前の

誰もいない 部屋

朝は

日差しと 静けさを

引き連れて

やって来て

そして占有した

ガラス窓の

カーテンの隙間から

斜めに差し込む

幾筋かの

带状の光

：

花と蔦の柄の

布製の椅子の一部を

無言で

透明な白金色に

輝かせている

：

ニス塗りの

茶色い

木のひじ掛けを

戸棚にしまった陶製のカップや

スプーンを

：

これから　ざわざわと

やって来る　人間達

（お客や従業員）に

あたかも　仕える前の

ひと時の　憩いを

味わっているよう

えびろーぐ

まどろみの

次に寄せくる

まどろみの

そのまた次にくる

まどろみの

朦朧と

森羅万象

その断片と

切れ端を

引き連れて

なかを進んで

また進み

さらになかへと進み

：

やがて

目覚めへ



どりっぴんぐ ぽえむ

もり とむ
森 土霧

発行 2015年2月1日
発行者 横山三四郎
出版社 eブックランド社
東京都杉並区久我山4-3-2 〒168-0082
<http://www.e-bookland.net/>

©Tomu Mori 2015

本電子書籍は、購入者個人の閲覧の目的のためのみ、ファイルのダウンロードが許諾されています。複製・転送・譲渡は、禁止します。